

名古屋の年中行事 「恵方参り」	場所	鶴舞中央図書館 2階展示コーナー
	期間	2009年1月17日（土） ～2009年4月16日（木）

名古屋独特の節分の行事として知られているものに、「恵方参り」があります。恵方参りとは、名古屋城を中心として、東北東（龍泉寺）、西南西（荒子）、南南東（笠寺）、北北西（甚目寺）にある観音（尾張四観音）のうち、その年の恵方にあたる恵方観音に参詣するもので、江戸時代から盛んになった風習です。現在では節分の行事として知られている恵方参りですが、江戸時代には節分ではなく1月18日の初観音（観音の縁日）に行われる行事でした。

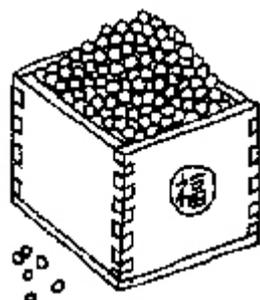
江戸時代の「恵方参り」の様子は、『尾張年中行事絵抄』や『名陽見聞図会』に描かれています。『尾張年中行事絵抄』には、「正月十八日」の年中行事として「四観音の方位、その年々の恵方にあたりたるを恵方観音とて、取分参詣おほし」と紹介されています。また、『尾張名所図会』の画家としても有名な小田切春江（歌月庵喜笑）による天保3年（1832）から天保10年（1839）の絵入りの日記である『名陽見聞図会』には、ほぼ毎年、1月18日に恵方参りに行ったことが書かれており、少なくとも江戸時代後期には「恵方参り」は1月18日の風習として定着していたことがわかります。

『名陽見聞図会』には、天保3年から天保10年にかけての節分（立春の前日）についても記されていますが、不思議なことに天保3・6・(9)年には節分が2回、天保4・7年には節分が1回あり、天保5・8・10年には節分ありません。（4頁の「江戸時代の初観音と節分」参照）

江戸時代に使われていた旧暦の日付は、季節を正確に表さないため、立春などの二十四節気を用いてその不都合を補っていました。そのため、立春は12月15日から正月15日の30日の幅の中で日付が移動することになり、天保8年のように、元日立春になると前日の天保7年の大晦日（大三十日）が節分になり、「当年、節分大三十日にして、龍泉寺参り少なし」ということもありました。

これに対して、恵方は季節に関係なく元日（1月1日）という日付を基準として毎年変わるため、江戸時代には「節分」と「恵方参り」が結びつかなかったと考えられます。

しかし、明治5年に旧暦から新暦に改暦され、さらに太平洋戦争のさなかには、旧暦の日付や暦注の使用が禁止されるなど統制が厳重になり、神社仏閣の祭礼縁日（初観音など）を載せた民間の暦（おぼけ暦）も姿を消しました。こうして、「初観音」の文字は『暦』から消されてしまうのですが、二十四節気については残されたため、「節分」の文字は『暦』に残ることになりました。その結果、「初観音」の風習が忘れられていく一方で「節分」は残り、戦後の復興とともにさまざまな年中行事が再び行われるようになるなかで、「恵方参り」は「節分」と結びつくことにより復活し、現在のような「節分」の「恵方参り」が定着したのかもしれない。



参考文献

『暦のはなし十二月』 内田正男 雄山閣 1991年

『暦ものがたり』 岡田芳朗 角川書店 1982年

『現代こよみ読み解き事典』 岡田芳朗 柏書房 1993年

展示資料

①	「甚目寺初観音詣」 (『尾張名所図会 前編七』 岡田啓 [編] 永東書店 1880年)
②	「甚目寺 初観音」 『名古屋叢書三編 第五卷』 名古屋市教育委員会 1988年
	「尾張年中行事絵抄 春之部」より。文中に「四観音の方位、その年々の恵方にあたりたるを恵方観音とて、取分参詣おほし」とあり、江戸時代には初観音(1月18日 観音の縁日)に恵方参りが行われていたことがわかります。
③	「龍泉寺節分詣」 (『名古屋名所団扇絵集』 森玉僊/画 中日出版社 1977年)
	森高雅(玉僊、寛政3年～元治1年)の画。尾崎久彌による解説には、「節分詣、同寺内殊に裏坂の眺望を示したもので、後、尾張名所図会挿絵の粉本となつたかと思われる」とあります。
④	「龍泉寺裏坂の眺望」 (『尾張名所図会 後編四』 岡田啓/[編] 永東書店 1880年)
	木村雲溪(文政12年～明治13年)の画。「松洞山龍泉寺」の紹介文には「殊に近年は、開運厄除等の守札を賦与す。正月十八日又節分の日などは、諸人群参して札守を受くる、幾千といふ数をしらず」とあり、初観音(正月十八日)と節分会の両方が盛んであったこと分かります。
⑤	「節分日龍泉寺参 俄雨混雑のてい」 (『名陽見聞図会』 歌月庵喜笑著 美術文化史研究会 1987年)
	「ことし節分ハ十二月廿六日也。此日、龍泉寺へ参る事、むかしハなかりし由。近き頃ハ、此日参詣して開運或ひハ厄除の札を受る事となりしに、此一番札をうけし者ハ、其年吉事ありとて未明より参詣する人多かりし…」とあり、この頃から龍泉寺の節分の参詣が盛んになったようです。
⑥	『名陽見聞図会草稿』 (鶴舞中央図書館特別集書)
	『名陽見聞図会』は、『尾張名所図会』の画家である小田切春江(歌月庵喜笑)による天保3年(1820)から天保10年(1827)にかけての絵入りの日記です。初編之上(天保3年1月)～六編之上(天保8年6月)と八編草稿(天保10年1月～9月)が現存しており、当館では四編之上と八編草稿の部分を所蔵しています。
⑦	『名陽見聞図会 四編之上』 (鶴舞中央図書館特別集書)
	当館所蔵の四編之上。当館所蔵の四編之上と八編草稿は、東洋文庫所蔵の他の編とあわせて、美術文化史研究会により影印・翻刻されています。なお、当館所蔵の四編之上の序文部分は、どのような経緯をたどったのか不明ですが、東洋文庫所蔵の四編之下に綴られています。
⑧	「龍泉寺 初観音」 (『名古屋叢書三編 第五卷』 名古屋市教育委員会 1988年)
	「尾張年中行事絵抄 春之部」より。馬頭観音を本尊とする龍泉寺の境内には、馬を引き連れて参詣する人々や縁起物として馬頭をかたどった春駒を商う店が多くあった様子が描かれています。

⑨	「龍泉寺節分会の宣伝車」 (『保存版・瀬戸線の90年』 郷土出版社 1997年)
	宣伝車の看板の上部には「恵方」の文字が見えます。また、看板の下部に「二日夜は全線徹夜運転」とあり、大晦日の夜から参詣が始まる現在の初詣の風習と同様に、節分の日の前夜から参詣が盛んに行われたようです。

⑩	「瀬戸電鉄沿線図会」 (『名古屋鉄道百年史』 名古屋鉄道 1994年)
	昭和初期の瀬戸電の沿線図。中央にあるのが龍泉寺で、その大きさから沿線観光の中心であったと思われます。小幡駅から龍泉寺に続く破線は開業当初から計画されていた「龍泉寺鉄道未成線」です。

⑪	「小幡駅の駅舎」 (『名古屋近郊電車のある風景今昔』 徳田耕一著 JTB 2003年)
	昭和8年に建て替えられた小幡駅の駅舎は、龍泉寺の堂宇を模していました。

⑫	「龍泉寺の春駒と袋」
	春駒の由来が次のように記されています。「張り子の駒がつまって張り駒になり縁起がよいというので春駒と呼ばれるようになりました。節分が来ると春駒を玄関に飾って一家の魔除に掲げたものですが現在民芸品となっています。・・・」

⑬	「歳徳神と恵方」 (『高島暦』 高島歴出版 2008年)
	歳徳神の方角が「恵方」となり、万事大吉とされています。歳徳神のいる方角は干支の十干によって決まります。

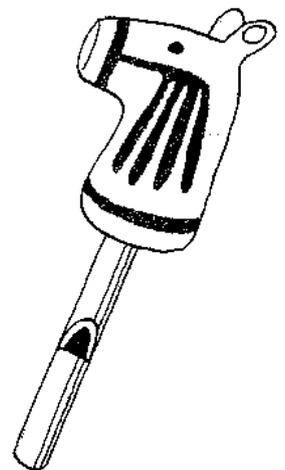
龍泉寺節分会がにぎわうようになった理由

今年の恵方は東北東ですので、恵方観音は龍泉寺になります。龍泉寺の節分会は昔からにぎわっていたようで、「四観音とも電車で簡単に行かれるようになってから、参詣者は年々ふえる一方だったが、昔は瀬戸電がいちばん早く開通していたので、恵方にかかわらず龍泉寺へ出かけるものが多かった」(『日本のおへそ』 中部日本教育文化会 1968年) そうです。

さらに古くは、江戸時代の天保4年頃(1833)には、すでに龍泉寺の節分会が特別にぎわうようになっていたことが『名陽見聞図会』に書かれています。

「ことし節分ハ十二月廿六日也。此日、龍泉寺へ参る事、むかしハなかりし由。近き頃ハ、此日参詣して閑運或ハ厄除の札を受る事となりしに、此一番札をうけし者ハ、其年吉事ありとて未明より参詣する人多かりし・・・」

馬頭観音を祀った龍泉寺の縁起物としては「春駒」が有名ですが、『新修名古屋市史 民俗編』に「龍泉寺では、夕方近くにお札を巻いた福木も撒かれ、参拝者が縁起物として拾う」とあるように、節分に撒かれる「お札を巻いた福木」も縁起物として今も昔も評判のようです。



江戸時代の初観音と節分（『名陽見聞図会』より）

年号	干	恵方	恵方観音	初観音（1/18 観音の縁日）	節分（立春の前日）	立春
天保3年	壬	北北西	甚目寺	「十八日雨天にて、恵方観音甚目寺参詣少し。」 (1-3 図：甚目寺参、雨降のてい) 「…四観音の内、当寺と笠寺ハ、いつにても参詣たへまなし…」	「四日、節分。」	1/5
					「十五日、節分。御停止に付、豆まきハならず。柊さす事ハ苦しからず。又、厄払ひも来らず。」	12/16
天保4年	癸	南南東	笠寺	「十八日、朝ハくもりなりしが、昼後、空晴て恵方観音笠寺群集す。」 (2-2 図：初観音参、笠寺群集)	(2-39 図：節分日龍泉寺参俄雨混雑のてい) 「ことし節分ハ十二月廿六日也。此日、龍泉寺へ参る事、むかしハなかりし由…」	12/27
天保5年	甲	東北東	龍泉寺	「十八日、恵方観音龍泉寺参り大群衆。是ハ去冬、節分に雨降て参詣少かりし故、今日は猶更群集なりといふ。」 (3-2 図：龍泉寺恵方参)		なし
天保6年	乙	西南西	荒子		「七日、節分。」	1/8
					「十九日、節分。」	12/20
天保7年	丙	南南東	笠寺	「十八日、当年ハ笠寺、恵方観音とて、今日大脈合也。」	「当年、節分大三十日にして、龍泉寺参り少し。」	なし
天保8年	丁	北北西	甚目寺			1/1
天保9年	戊	南南東	笠寺			1/11 12/22
天保10年	己	東北東	龍泉寺	「十八日、大須聖徳太子堂上棟、投餅をなす。恵方竜 <input type="text"/> 」		なし

* 「恵方は陰陽道の十干に基づくため、南南東にあたる笠寺観音（笠覆寺）は五年に二回、ほかは五年に一回あたることになる」（『新修名古屋市史 民俗編』）

* 「干」と「立春」の日付は『日本暦日原典』より

* 天保8年7月～天保9年12月部分は現存していません。

